NEWS LINER

ラピダスと美々川の流域に見る先端半導体工場による影響は？

■さっぽろ自由学校「遊」が千歳や苫小牧でバスツアーを開催

4年前から先端半導体工場の立地が地域にもたらす影響などを学んできた、NPO法人さっぽろ自由学校「遊」が主催するラピダスや美々川・ウトナイ湖の一帯をめぐるバスツアーが9月26日に行なわれた。

莫大な電力や水資源を使うだけでなく、工場から排出される恐れのあるPFAS（有機フッ素化合物の総称）などが周辺自治体に影響を及ぼすのではないか――として、半導体製造工場の周辺や美々川流域の環境保全地区を見て回る企画。札幌圏の市民や、同様の問題を抱える熊本県民ら約60人が参加した。

訪問先は、札幌駅から千歳川サーモンパーク、ラピダス周辺、美々川やウトナイ湖を経由し、苫東地区の工業用水供給施設をめぐるルート。「遊」の半導体講座の常任講師・藤原寿和さん（東京都環境局OB）、苫小牧在住のライター・菊地綾子さん、日本野鳥の会苫小牧副支部長の奥山博美さんがガイド役を務めた。

江別市では、上水道の水源の半分以上を千歳川に頼ることもあり、ラピダスの排水中に含まれるPFASの影響などについて市民の関心が高いことを、江別市議の干場芳子さんが解説。千歳市議の相沢晶子さんは、30年余り前に策定された市の環境計画の中で、ラピダスがある「美々ワールド」の立地企業の排水は市が下水処理を行なう旨が盛られた経緯を紹介。「（ラピダスの立地にともない）想定外の処理をする時には、新たな計画を策定する、とすべきだった」と強調した。

そのラピダスへの立ち入りは認められず、バスの中から塀越しに工場の建物などを見学。半導体講座のメンバーは最近、ラピダスによる大気汚染の可能性などを調べようと、工場付近の道路に積もった粉塵を採取テルルなどの物質を検出したが、半導体工場に起因するかどうかは分からない。今後も調査を続け、発生源を特定したい」（藤原さん）。

〝ラピダス効果〟に過大な期待を抱いた苫小牧市は、市街化調整区域で建物を造れない美々川の隣接地を含む国道36号沿いの土地で、建築規制を緩和すべく「土地利用方針」をまとめ、今年1月の都市計画審議会に示した。それは、ラピダス関連の物流倉庫と付随する事務所などの建設を可能にするものだった。

こうした動きに対し、近隣住民や美々川・ウトナイ湖の自然保護活動の関係者らが反発。道が3月中旬から実施した、変更素案をめぐるパブリックコメントには753件の意見が寄せられ、その90％は「反対」が占めた。丁寧な環境調査と説明を求めるオンライン署名が行なわれ、地元の町内会連合会の説明会でも賛成意見はなかったという（紙の街の小さな新聞『月刊ひらく』を参照）。



道企業局の担当者（左）からラピダス向け工業用水の説明を聞く

これらの動きを受け、金澤俊市長は7月30日の記者会見で土地利用方針の廃止を表明するに至る。今回のツアーでガイド役の菊地さんは、一連の経緯を紹介し、札幌周辺の人たちにも美々川流域の動きに関心を寄せるよう呼びかけていた。

一行は、ウトナイ湖を望む日本野鳥の会のサンクチュアリや、環境省の野生鳥獣保護施設も見学。ガイドの奥山さんから、道央圏に残された豊かな自然環境の重要性についての説明に熱心に耳を傾ける時間も。

最後は苫東地区の一角にある道企業局の「苫小牧地区工業用水道第2施設」を見学。安平川から取水した日量10万トンの水を浄化・送水しており、日量の24％をラピダスに供給する。参加者たちは道側の供給体制に関する説明などに耳を傾けた。

（ルポライター・滝川 康治）